

六花

RIKWA

12

俳句雑誌りつか
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno



こん
今

冬木の芽

山田六甲

遠島の日暮ひくろうなつて冬の雷
見下ろせる冬田へ雷神こけ落ちぬ
冬虹を鳥居がはりに神の山
枯葦に本降りとなる傘もなし
濡れ畔くろにふんばつて柚子もぎにけり
目の前を冬神鳴りの走りけり
柗の花指させる茶室かな
はりまとは佳き名なりけり冬木の芽
霜月もすぎぬ眼を湯に洗ひ

和田山の白満天星紅葉かな

青垣の落葉してゐる紅葉とよ

ほだされて買ひしが旨し松葉蟹

城之崎美人

郁子熟れて見越の松にからみけり

中庭の軍手に郁子を熟かせあり

底冷えのをほどけば楽茶碗

潜りては近づいてくるかいつぶり

印南に八十九池鴨渡る

加古池に鶴立ち寄ると草紅葉

江藤庄一さん

雪嶺抄

隠れ月

笹村 政子

酒蔵の片屋根くらき帰燕かな
碁敵はきのふに交はり法師蟬
ゆるるたび風船葛灯りけり
てのひらに火照つてきたる椿の実
わたしだけ匂うてみたる灸花
鯔とべり泳ぎたらざる少年に
初紅葉かすかに風をいただきぬ
やうやくに月得て人の歩みそむ
待宵の流れし雲を戻しくる
ほのかなるところありたる隠れ月

盆踊一寸踊つて帰りけり

谷口一献

ぼんおどりちよつとおどつてかえりけり たにくちいつこん

片頬に火照り残るや盆踊

今年また年寄ばかり盆踊

淋しさを燃え尽くしたる踊かな

うなじ濡れ浴衣の乱れ盆踊

盆踊一寸踊つて帰りけり

秀句の条件は独創性があり、簡潔で理解し易いこと、覚え易く口に出して唱え易いこと、色紙に書いて飾っておけることなど。この句は見事にそれらをクリアしている。一寸とは、盆踊りがつまらなかつたからではなく、このような踊りへの関わりかたもあるというのを知らしめてくれた。この句、踊りを見ているうちに自分も踊ってみたくなった。血が沸いたのである。そこで少しだけ踊つてよしとした。踊つた時間は短かつたけれど、心満ち足りた様子が伝わってくる。この人は物事に溺れない人かもしれぬが、人付き合いもよく波乱なく物事を全うできる人にちがいない。

雪卿集

父 親
志方 章子

八月は嫌ひと言ひつすこし好き
地を這うて死に蹴みたる油蟬
父親の張り切つてゐるキャンプかな
キャンプ果つ精根尽きるまで遊び
遠花火丘の向うの色めける

芋 水車
佐津のぼる

色分けの予定表の夏終りけり
提灯を連ねて暗き盆踊
連れ鳴きの声よどみなき秋の蟬
芋水車あれば掛けたき流れかな
酔芙蓉チャイムに下校うながされ

雪卿集

秋の昼

出口

誠

河^{かわ}岸^{ぎし}に赤き線引く彼岸花
柿の実の色づき始む堂の前
二人してパズルに夢中秋の昼
夫婦してパズルのできぬ秋の昼
秋の蝶垂直離陸してをりぬ

踊

升田ヤス子

りんご飴母にあづけて踊りけり
よごれしが嬉しや盆の踊り足袋
一斉にくびすを返し踊の輪
盆太鼓叩きて指のたこ自慢
尻はしよりをとこの踊る鉄砲節

雪卿集

盆踊り

永田万年青

相の手を打ちつつ踊り整ひぬ
踊りつつ輪から抜け出す二人かな
盆踊り稚児の手足のよく動き
盆踊り刻々と輪の拡がり来
何もかも遅くなり来し秋思かな

山頂駅

松本文一郎

残暑かな山頂駅の気温問ふ
出不精や祭太鼓に誘はれ
川霧や対岸の灯のぽつぽつり
爽やかや渋茶を好む友来たる
秋深むうすぼんりの防犯灯

雪樹集

秋の昼

出口

誠

河岸かみぎに赤き線引く彼岸花
柿の実の色づき始む堂の前
二人してパズルに夢中秋の昼
夫婦してパズルのできぬ秋の昼
秋の蝶垂直離陸してをりぬ

踊

升田ヤス子

りんご飴母にあづけて踊りけり
よごれしが嬉しや盆の踊り足袋
一斉にくびすを返し踊の輪
盆太鼓叩きて指のたこ自慢
尻はしよりをとこの踊る鉄砲節

世界一読みづらい評で会員の殆どは
自分のところしか読みません。

蛍雪譚

六甲選

二十七年十二月号鑑賞

酒蔵の片屋根くらき帰燕かな 笹村 政子

秋の日差しは角度が低く蔭の濃淡が強いので日の当たらないところでは特に暗く感じる。その上空を燕が南の島へ帰って行く。燕を見送る惜別の寂しさと片屋根の暗さと同調したのである。

碁敵はきのふに変わり法師蟬

昨日の碁敵が変わって、今日の新たな敵は、法師蟬の騒がしさに変わったのだ。敵が目の前にはいるのではなく耳につく騒がしい敵なのだ。清の『仕女娛図冊』（宮廷の女性が娯楽に興じる絵）の「自奔一人碁を打つ」のように一人碁を楽しんでいる場面かと想像する。「自奔」の中国訓みは知らず。

ゆるるたび風船葛灯りけり

電球のように、風船蔓に電気が通っているはずはないから、風に揺れて日陰から日面に出たり入ったりしている場面である。日面に出たときには明るく、電球が灯ったように見え蔭に入った時には消えた状態なのである。風のたびに消えたり灯ったりするのを見ているとどこか涼しげに安らぐのだ。「夏の頃白い細かい小花をつけて秋の頃まで咲きつづけ、つぎつぎに萌黄色の朔果を結ぶ。その形が風船に似ている」と青柳志解樹氏は解説。

六
社
集



十二月号

平居 滯子

夫の忌のまた巡り来る秋半ば
病室に月光ひとすぢこぼれけり
霧の橋いく度渡り奥の院
秋麗の新居の鍵を託さるる
秋の夜半幼き者を両脇に

森山あつ子

あの星で祝盃あげる彼岸花
足音の混じりて進む盆踊り
青桐や酷暑の葉陰涼をとり
敬老会幕引く人の初老なり
目薬を差しつ片目で相撲見し

大内 幸子

玉虫の飛び立つ彼方飛行雲
少しづつ日短となり寺の鐘
挽白の庭石となり虫の宿
子は去りて皆は無口に昼の虫
またしても忘れ物して鹿の笛